

菊池寛の啓吉物に関する一考察

―「悪魔の弟子」「悪因縁」などを視点にして―

小林和子

一、

菊池寛は、一高の同級生らが作った同人誌、第三次「新思潮」、そして第四次「新思潮」に参加した。特に第四次「新思潮」に載った芥川龍之介の「鼻」などの作品が漱石に激賞されたことで文壇にデビューしていったことから、芥川や久米正雄や菊池寛のことを一般には大正後期の文学グループ「新思潮派」と呼ぶ。

しかし、一高の同級生がほとんどそのまま東京帝国大学に進学したのに対して、菊池寛は、芥川や久米、成瀬正一、松岡譲らと第一高等学校で同級生ではあったが、マント事件と呼ばれる友人の窃盗の罪を被って、一高を卒業直前にやめざる得なくなった。結局、実家が貧しかったため、友人成瀬正一の父親の厚意で、大正二年の九月に一人京都帝国大学へ進学したのだった。

京都にいた菊池が「新思潮」に参加したのは、一高時代の友人達が声をかけてくれたからであった。温暖な瀬戸内に育ち、貧困がために高等師範に入り、紆余曲折を経てようやく憧れの一高に入学し、一高時代は弊衣破帽をむねとするバンカラな一高での青春を謳歌し

ていた菊池だったが、友人を庇うためとはいえ、その一高を退学し、一人貧しく孤独な学生生活を京都で送っていた。そのときに一高時代の友人達から同人への参加の誘いをもたらしたのである。かねてより創作者を夢見ていた彼は早速第三次「新思潮」（大正三年二月創刊）に毎月のように戯曲や翻訳を送り、第四次「新思潮」に戯曲や、初めての小説といえる「身投げ救助業」（大正五年九月）などを発表し小説家としての第一歩を歩みはじめた。しかし、実際に文学者として認められたのは芥川や久米であって、第四次「新思潮」時代の菊池寛は注目を浴びなかった。それで、大学を卒業後成瀬氏の紹介で生活のため時事新報の記者になったのである。

そして、彼が初めて小説家として注目を浴びたのは「中央公論」（大正七年七月）に書いた「無名作家の日記」においてであった。そのときの事を「半自叙伝」（「文藝春秋」昭和三年五月〜四年十二月）に次のように書いている。

あるとき、時事新報社から帰って来ると、その路次の入口に、自家用の人力車が止つてゐた。その頃の自家用人力車は現在の自

家用自動車と、匹敵してゐると思ふ。私は、(あゝ、「中央公論」の瀧田氏だな)と直覚した。その頃の瀧田氏の文壇に於ける勢威は、ローマ法王の半分位はあつたと思ふ。殊に、その自家用の人力車は有名であつた。私は、家へ入つて見ると、瀧田氏ではなかつたが、瀧田氏の命を受けた高野敬録氏であつた。この頃、「中央公論」へ書くことは、中堅作家としての登録をすますやうなものだつたから、私はこのときの嬉しさを今でも忘れない。

このとき、高野氏に手交したのが、「無名作家の日記」である。

これは「黒潮」といふ雑誌に寄稿したのだが、「黒潮」の廃刊に依つて、私の手許に帰つてゐたものである。この作品は、瀧田氏がよんで、その中の一人物を芥川ではないかと思ひ、私が芥川に対する反感を書いたのではないと思ひ、心配して芥川に訊いたとの事であるが、しかし、これは瀧田氏の杞憂であつた。

この瀧田樗蔭の杞憂問題は後で触れるとして、この作品が菊池にとつて文壇に本格的に打つて出る意欲作であつたことは間違いない。その予想があたつて、彼は新進作家の道を歩みだしたのだった。

菊池寛は後年通俗小説作家となつて大成功し、「文藝春秋」を創刊し、文壇の大御所、ジャーナリスト界の大立者となつて、実業家としても成功した稀有な文学者であるが、その面ばかりが注目を浴び、芥川などとの交友関係が触れられる事はあつても、文学者とし

ての菊池寛は今まであまり注目を浴びてこなかつたように思われる。

彼の初期の作品では、「忠直卿行状記」(「中央公論」大正七年八月)や「恩讐の彼方に」(「中央公論」大正八年一月)などのようなテーマ小説と「父帰る」(「新思潮」大正六年一月)などの戯曲が現在では一般に有名であるが、今ではほとんど問題にされる事は無いが、最初は「啓吉物」と呼ばれる一連の自伝的作品が注目されたのだつた。

そこで、本稿では、菊池寛の啓吉物と総称される一群の短編小説の意味をあらためて考えてみたいと思つている。なぜなら、彼の啓吉物と称される自伝的作品は、明治四十年代から大正時代にかけて文壇を席卷し、長く日本の近代文学の純文学の代表的形態として続いていく、田山花袋の「蒲団」(明治四十年)や島崎藤村の「春」(明治四十一年)などの作品にはじまる自然主義的な私小説とは一線を画すと考えられるからである。

菊池寛は「半自叙伝」の中で次のように述べている。

私の文学趣味は、この間に養はれた。図書館に通ひ出してから、は、そこに在る小説といふ小説は、大抵読んだわけだつた。だが、私は中学の四年のとき、庭球の選手になつた。そのために、私は一時文学の方を遠ざかつた。それから、中学を出てから二年間も

亦文学を顧る暇がなかった。このことは、私にとって非常にいゝことだった。私は、三四年間文学に遠ざかつたために、その当時文壇を風靡してゐた自然主義の影響を殆ど受けなかった。私が若し、その三四年間、文学に執心だったら、きつと自然主義の使徒になり、到底文壇に出ることは出来なかつたと思ふのである。青年時代に、その時の文壇の影響をあまりに受けすぎると云ふことは、その時代の文壇のスワン・ソングになつても、次ぎの時代の文壇には出られないやうな気がする。私は、自然主義に親しまなかつたために、その次ぎの文壇に顔を出し得る要素を蓄積することが出来たやうに思ふのである。

つまり、菊池寛の自伝的小説、一見すると私小説であるように見えるこの一群の啓吉物と呼ばれる作品は明らかに自然主義の影響の下になつたものではないことがわかる。それでは、これらの作品群は作者のどのような意識から生み出されたものだろうか。ちょうど発表時期が重なってくる、藤村の姪との關係を告白した「新生」(「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」大正七年五月一日〜翌八年十月二十四日連載)や私小説作家・葛西善蔵「子をつれて」(「早稲田文学」大正七年三月)などの自然主義的な私小説とどのように違つてゐるのであるか。

同じ仲間の芥川が、あえて自らの私生活からは遠い所に彼のテ-

マを託す素材を探して出発していったのとは菊池の場合は対照的なのである。

従来、菊池寛の啓吉物は他人を見るように自己を見つめる客観性が高く評価されてきた。

しかし、その内実を詳しく検証されることはかつてなかった。

啓吉物の特徴を捕らえることは、菊池寛という文学者の特徴を問ひ直す事にもなるであろう。そのような大きな問題を考えていくにあつたつて、ほとんど現在顧みられることの無い菊池寛の啓吉物という作品を本稿では少し具体的に見てみたいと思う。

その事を考えていく前提としてまず、菊池の啓吉物とはどのような作品を具体的に指しているのか明確にしておきたい。

二、

啓吉物と総称されているが、菊池寛のどの作品がそれに当たるのかは厳密には特定しにくい。そこで本稿では、啓吉と称される主人公及び啓吉と似た名前の主人公もしくは登場人物が作者・菊池寛と思われるもの、及び大正十三年二月に玄文社から刊行された『啓吉物語』に所収された作品と定義し、それに当てはまると思われる作品を作品時代順に次に列挙してみる。へ〜が主人公名であり、簡単な内容をつけくわえた。

「悪魔の弟子」(「帝国文学」大正七年一月発表)、(近藤啓吉)、

友情という名の偽善を描く。

○「無名作家の日記」(「中央公論」大正七年七月) (俺、富井)、山

野―芥川、桑田―久米、京都時代の鬱屈した友人への気持ちを描いた話。

○「青木の出京」(「中央公論」大正七年十一月) (雄吉)、青木―佐

野、近藤家―成瀬家、マント事件の話。

○「大島が出来る話」(「新潮」大正七年六月) (讓吉)、近藤家―成

瀬家、成瀬夫人への思い。

「死者を嗤ふ」(「中央文学」大正七年六月) (啓吉)、江戸川に浮

かんだ溺死者の死体を引き上げる作業を物見高く見物する

群衆心理のエゴイズム。

○「父の模型」(「新潮」大正七年十月) (啓吉)、長女誕生の話。

「愛嬌者」(「文章倶楽部」大正七年十一月) (啓吉) と夕刊売り

の少年、「道を訊く女」と同主題。だまされているほうがい

いことをしてやったという快感の中に居られる。

○「盗人を飼う」(「新家庭」大正八年一月) (啓吉)、盗癖のある女

中の話。

○「葬式に行かぬ訳」(「新小説」大正八年二月) (富井雄吉)、近藤

家―成瀬家、京都時代の苦い思い出。

○「我鬼」(「新小説」大正八年三月) (彼)、電車の中で老婆に席を

譲る事に関しての話。

「たちあな姫」(「太陽」大正八年四月) (私、新聞記者・木村)

―ロシア革命の悲劇の皇女と間違える話。

○「まどつく先生」(「文章世界」大正八年五月) (木村健吉)、近藤

哲夫―佐野、悪ふざけをして試験を延期させようとしたが、

先生の娘さんが危篤であったことを知らされた話。

「小説『灰色の檻』」(「中央公論」大正八年七月) (富井啓吉―作

家)、ファンの杉村中尉が持ってきた小説を買って欲しいと

いう話。

「友と友の間」(「大阪毎日新聞」大正八年八月十八日〜十月十四

日連載) (木村雄吉)、久野―久米、杉村―松岡、漱石の木曜

会での疎外感と久米の失恋事件。

「簡単な死去」(「新潮」大正八年十月) 主人公「木村雄吉」新聞

社の同僚の急死のこと―身近な人が死んでも自分が生きて

いることを喜ぶエゴイズム。

「神の如く弱し」(「中央公論」大正九年一月) (雄吉)、河野―久

米、吉岡―松岡、久米の失恋事件の後日談。

○「出世」(「新潮」大正九年一月) (讓吉)、―図書館での下足番と

の再会。

○「盗者被盜者」(「中央公論」大正九年四月) (淳吉) 夫婦物、着

物を盗まれた話。

○「祝盃」(「電気と文藝」大正九年九月)〈啓吉〉、久野—久米、青木—佐野、佐野との再会を書いたもの。「青木の出京」に似ている。

○「妻の非難」(「人間」大正十年一月)〈敬吉〉、通俗小説に変わった事への妻の反応についての逸話。

○「啓吉の誘惑」(「新潮」大正十年一月)〈啓吉〉夫婦物。女中になつたファンの女性の話。

○「R」(「野依雑誌」大正十年六月)〈木村啓吉〉、京都時代の先生と牡蠣をレストランで食べる話。

「流行児」(「中央公論」大正十年六月)〈小説家・木村健〉、彼の戯曲を「流行児(はやりっこ)」と呼ばれたことへの不安を書いたもの。

○「将棋の師」(「新小説」大正十年十月)〈彼〉、京都時代の将棋の師だつた床屋を訪ねる話。

「中傷者」(「新潮」大正十一年一月)〈小説家・木村健〉、地方の講演会でのこと。

「悪因縁」(「新小説」大正十一年三月)〈木村啓吉〉、「小説」『灰色の檻』の後日談。

○「肉親」(「新潮」大正十二年一月)〈私、寛、次兄に関する話。○「盗み」(「中央公論」大正十二年九月)〈私〉、少年時代の盗みにまつわるエピソード。

○「従妹」(「中央公論」大正十二年四月)〈私〉、従妹へのほのかな思いと再会後の変貌。

○「天の配剤」(発表誌不明)〈自分〉、京都時代に劇場で財布を取られたことと、その後懸賞文に入賞した話。

「微苦笑」(「中央公論」大正十三年五月)〈木村啓吉〉、他山野、野田、三井、講演先の大阪で女に誘惑されかかった話。

(○印は『啓吉物語』所収の作品)

以上三十一編を一応本稿では啓吉物と呼んでおこうと思う。主人公の名は見ての通り、啓吉ではなく、敬吉、雄吉、讓吉、木村という作家名が与えられている場合もある。また、「私」として、直接作者がエッセイ風に登場するものもある。ただし、ここでは、敬吉と主人公がなつていても明らかに主人公が作者・菊池寛とは関係ないと思われる作品(「海の中」)、及び、『啓吉物語』に所収されなかった、「私」となっているエッセイ風の小品(「マスク」「或る日来た人達」など)はあえてはずした。

三、

啓吉物の最初と思われるのは「悪魔の弟子」(「帝国文学」大正七年一月発表、『恩を返へす話』大正七年八月、春陽堂刊所収)という作品である。雑誌「帝国文学」は明治二十七年に東京帝国大学の

関係者が集まって「共に文学を研究し兼ねて親睦を厚うする」ことを目的に結成された帝国文学会が主体になって翌二十八年一月から大正九年まで発行されていた雑誌である。東京帝国大学の学生が中心となっていた雑誌であり、大正四年九月号には芥川の「羅生門」が載ったことでも知られていて、この雑誌に菊池は大正六年二月に「道を訊く女」という小品を載せている。第三次「新思潮」に誘われた菊池は学生編集委員であった芥川や久米らの紹介で「帝国文学」にも作品を発表するようになったのであろう。

「クリスチャンであり、一個の若い理想主義者であった啓吉は、此の学校へ入学が許された時には、本当に欣んだ。と云うふのは、此の学校の校風が厳粛で真面目で啓吉の理想にシツクリと合つて居たからだ。」という一文で始まっていて、「北海道の、ある私立学校の教師の子ども」という設定などを見ると啓吉は、そのまま作者・菊池寛というように考えるのは難しい。何より、菊池はクリスチャンではないし、四国高松出身で北海道出身ではなく、父親は小学校の庶務係であった。そして、何より、この作品は『啓吉物語』に所収されていない。しかし、啓吉物の最初であるこの作品はそれ以降の作品と同様に作者の体験が影を色濃く落とした作品なのである。舞台となっている「此の学校」は東京のいうことになっていてるので一高とも思われるが、大学のようにも設定されてあいまい化されている。貧しい啓吉にさりげなく寄宿料を立て替えてくれたり

する「京都の豪商の家に育つた所謂、坊^{ぼん}」である、医科に学ぶ最も年少のおとなしい「布施」は、菊池の高松中学時代の年少の友人や、菊池を常に経済的に救ってくれた親友・成瀬正一の影も感じられる。日頃『友情の真諦』を説く啓吉は、実家へ帰った布施が風邪をこじらせ重態になった事を知り、仲間が用立ててくれた汽車賃で京都まで駆けつけるが、その車中、自分のヒロイックな行動に自ら酔い、親友の死に悲しむ自分の姿に感動する布施の両親の姿などを想像してしまうのだった。しかし、予想に反して布施は持ち直し、啓吉の見舞いに感謝し涙するのだったが、啓吉の涙は、親友の死を思った自分自身の「自責の涙」だった。

この作品は、作品中に引かれているように菊池が大学時代に傾倒していたバーナード・ショーの「悪魔の弟子」という作品がヒントになって出来た作品であり、友情という名の偽善を描いた作品である。しかし、ここには、実は色濃くマント事件が尾を引いているように思われる。特に、この主人公・啓吉がクリスチャンとなっていることは見逃せない。ここには、一高のときに最も親しかった佐野文夫の肩代わりをして一高をやめた事件の真相を、長崎というクリスチャンの青年にただひとり打ち明けたことが関係しているように思えるのである。

その前に簡単に一高時代のマント事件について触れておかねばならないであろう。これは、啓吉物の代表的な物の一つ「青木の出

京」にも描かれている。

青木のモデルは佐野文夫という人物で、白哲で狂的なところのある才気煥発な佐野に菊池は深く惹かれていた。彼が授業をサボると菊池が代返をして教師の質問にまで彼の代わりに答えるので外国人の教師が彼を佐野と誤ってしまふほどだったという。

ある日佐野が友人の妹とデートに出かけるため一高生のシンボルであるマントを着て行きたいと思ったが、彼も菊池も持っていなかった。佐野は寄宿舎のほかの部屋へ行って、友達のマントを借りてきたと言って出て行った。その数日後お金が無くて困ったときに、そのマントを一時的に質草にしようということになって、彼の代わりに菊池がマントを着て質屋に行った。しかし、数日後、マントの盗難事件が持ち上がり、菊池が疑われた。ちょうどそのとき佐野が外出していたため、菊池は抗弁せず、帰ってきた佐野に話すと、教育関係者の子弟であった佐野は非常にうろたえた。それで、菊池は、どうせ貧乏な自分はこれ以上学資も続かないということもあったので、佐野の身代わりに窃盗の罪を着て一高を辞めたのだった。

しかし、菊池は自分が身代わりになったことをただ一人、敬虔なクリスチャンだった友人・長崎太郎にだけ打ち明けた。潔癖な長崎は義憤を感じて校長に菊池の無実を訴え、一高では再調査ということになり、菊池を呼び出したが、彼は前言を翻すことはできないと、

あくまで自分がしたと言い張り、彼の放校は決定した。そして、菊池は一人京都へ進学したのだった。ただし、長崎の行為によって佐野の行跡が学校側にばれて、佐野の父親が上京し佐野も休学処分を受け、父親といっただん郷里へ帰された。最終的に佐野は皆より遅れて一高を卒業し、東大の独文科に入学したが、成瀬らの努力も空しく菊池の東大への進学は許されず、一人京都へ行ったのだった。

関口安義氏（注一）や片山宏行氏（注二）によると、長崎太郎氏宛の菊池の書簡や長崎氏の日記が見つかり、マント事件直後菊池が執拗に長崎氏を糾弾する手紙を送っていたことが明らかになった。数年後に京都大学で再会したときには確執は無くなっていたとは言うものの、マント事件の直後は、長崎の行為を自分の佐野への好意を無にしてしまう行為として激しく非難したのである。

ここには、すでに指摘があるように、菊池の佐野への友情以上の同性愛的な恋情があったことは確かであろう。しかし、京都での孤独な生活は自らの行為の空しさを菊池に痛感させるに至ったのだった。

この作品はクリスチャンである長崎の友情の名の下の偽善を描いたというよりも、佐野が結局、後に同じような窃盗事件を起して東大を退学してしまうに及んで、自らのヒロイックな友情自体に疑問を持つに至ったことがこの作品のもとになっていると思われる。『啓吉物語』に所収されることはなかったが、ここに菊池の啓吉物

の原点があったことは重要である。

この作品が書かれた大正七年一月という時期は、前年に素封家の娘と結婚し菊池は長年の生活苦から脱出し、彼が真面目に新聞記者生活をしてきた時期であった。彼は、ようやく自分を苦しめた一高時代の友情という名の恋に区切りをつけるために、この作品を書いたとも考えられる。菊池自身が述べているように自由奔放な青春に見切りをつけ、家庭を持った彼はこの頃から堅実な生き方を選ぶようになっていったのである。その結果の所産が啓吉物なのである。

四、

菊池寛の出世作となった「無名作家の日記」は、東京に残った高校の友人達に嫉妬する京都で孤独な学生生活を送る主人公の日記体の小説である。先に触れたように「中央公論」の瀧田氏が「芥川さんに悪くないですか」と聞いたというように、誰の目にもモデルが明らかに書かれていて、芥川と思われる友人・山野は「自分の秀れた資質を、自分より劣つた者に比較して、其処から生ずる優越感で以つて、自分の自信を培つて居ると云ふ、性質の悪い男」とされ、執拗に悪辣に描かれ、挙句には「山野なんかの作品なんかは十年もすれば、蚯蚓にだつて嗤はれなくなるのだ。」という呪詛で結ばれるのである。私小説全盛期にこのようなことを書けば、瀧田氏でなくても気にしないほうがおかしい。主人公に冷たい大学

の中田博士も明らかに上田敏がモデルであるが、この頃上田氏は逝去しており、問題になる心配は無かつたとは思われるが、芥川たちの反応を編集者が気にしたのは当然だった。しかし、ここにこそ、菊池の目論見があつたのであり、当時の自然主義的な私小説の逆手を取ることが、文壇で目を引く方法だと考えたと思われる。読者は作者の身辺暴露を期待し、それに刺激的に応えながら、菊池の得意とするテーマを明確に託していく。啓吉物の一つのパターンは菊池のテーマ小説の一つの方法論でもあつたのである。

そして同時に、彼がそこに居た場所への決別宣言ともなっているという側面もあるように思われるのである。「無名作家の日記」を書く事によつて、菊池は彼の暗い京都時代に別れを告げようとしているように思われる。確かに、彼は「無名作家の日記」によつて、文字通り無名作家時代に別れを告げたのであつた。

「青木の出家」という作品も、東京の街での偶然の佐野との再会から、菊池はマント事件に自ら決着をつけるために書かれたという側面があるように思われる。京都時代を通じて長く尾を引いたマント事件、その自らの青春の蹉跎に別れを告げることが新進作家としての地歩を固めつつあつた菊池には必要だったのである。

そういうように見ていくと詳述は紙面の関係で避けるが、啓吉物の多くがそのような過去への決別という側面を持つているように思えてくるのである。

「大島の出来る話」は、自らを慈しんでくれた成瀬夫人への哀悼と同時に、成瀬家に世話になり続けた自らの過去への決別をその中に含んでいるようにも思われる。

「父の模型」は、自分に似て醜く生まれた長女を可愛く思うようになる話で、その中には彼が長く引きずってきた容貌コンプレックスへの決別があるように思われる。

「葬式に行かぬ訳」は上田敏博士との出会いと香典をも用意できない自分を描く事で、その中には貧しく暗い京都時代への決別がこめられているようにも思われる。

「まどつく先生」は、日頃高校時代の英国人先生を困らせるような悪戯を得意になって近藤という悪友とやっていたが、その先生が娘さんを亡くすという悲しみに気がつかなかった愚かさを描いている。これも、佐野とつるんで得意になっていた一高時代の愚かさへの決別を含んでいると見る事もできるであろう。

「妻の非難」は通俗小説の世界へ入っていくとする菊池の決意と迷いへの決別を含んでいる。

「肉親」や「従妹」は自分の身近な人々への別れを含んでいるし、「盗み」は彼がずっと引きずってきた少年時代の「マイナス」と称した遊びによる嫌な思い出と共に、窃盗の罪を着たマント事件への決別も含んでいるように思われる。

菊池寛の啓吉物は主に、彼が前に進んでいくために過去を捨てて

いく過程として排泄されてきたものという側面も感じられるのである。かれは、せみの抜け殻のように啓吉物を書く事によって前へと突き進んでいったのではなからうか。

五

「無名作家の日記」で、菊池が瀧田氏に「芥川さんに悪くないですか？」と聞かれて芥川が気を悪くすることは無い、と断言したことを思えば、菊池の啓吉物と称される作品は、明らかに創作であるという了解が彼の友人間に出来あがっていたとも読めるが、「友と友の間」(「大阪毎日新聞」大正八年八月十八日〜十月十四日)や「神の如く弱し」(「中央公論」大正九年一月)などは、久米正雄はこれを読んでどう思ったのであろうとやはり慮らずにはいられない。久米自身が漱石の長女筆子と親友松岡譲との三角関係の結末を書いた「破船」を発表したのは大正十一年のことであり、菊池寛のこれらの小説はそれに二年以上先立つのである。仮名にしてあったとしても誰の目にも主人公が久米であることは明らかなのような小説を何故菊池は新聞に連載したのか。自然主義に否定的だった菊池のこのような暴露的な身边小説の意味は何なのだったのだろうか。後の「文藝春秋」のゴシップ記事、それは文壇と云う物が現代の芸能界のような存在で、当時急増していた中流読者層の興味が文学者の楽屋落ちの記事であったことを思えば、菊池がこのような作品を

書いた理由は、作者の暴露的私生活を求めている読者へのサービス精神からであったとも考えられる。しかし、自らの私生活を暴露するのではなく、ことさらに親しい友人を愚かで哀れな人物に描くような作品を書いたのかということは、菊池寛という人物を考えると、には重要になるであろう。晩年、広津和郎が「女給」で菊池をモデルに描いたとき、怒り狂った菊池を思うと余計に疑問を持つのである。文壇の大御所になったので名声に傷がつくことを恐れるようになったからだけなのであるか。勿論、人の悪口は言い放題だが、人に悪口を言われると非常に怒るようなタイプの人間はどの時代にも、どの世の中にもいるものであるが、ただそれだけなのであるか。芥川や久米の性格をよく知っていたので、結局彼等は怒ることとは無いと高をくくっていただけなのであるか。

ただし、これの一つのヒントとなると思われるのは他の啓吉物である「悪因縁」（「新小説」大正十一年三月）の中の次の文である。

彼は、中尉が停職になったことが、自分の責任かしらと思って見た。それには、モデル問題から考へて来なければならなかった。小説家が、自分の周囲に展開して来る人生を小説にかく。自分と接触して来る人と、自分との交渉を小説にかく。それは、啓吉の創作の主義から云えば、必然でかつ当然なことであった。彼は、小説を自分達が、いかに生活したかと云うことの報告書だと思っ

ていた。馬触るれば馬を斬り、人触るれば人を斬る。自分の生活に触れて来たものは、それを書くことが自然であり、又当然であると思った。自分に接触して来る人生、それを描かないで、何処に作家の材料があるだろうか。舷に、一人の文学志望の軍人があり、それが啓吉を訪ねて来た。その男の態度を、啓吉は卑しいと見た。それを啓吉は小説に書き表はした。鏡の前に、おかしな格好をして近寄る奴が悪いのだ。その姿をそのままに映す鏡が悪いのではない。彼は、そう考えた。

これは、先に発表した「小説『灰色の檻』（「中央公論」大正八年七月）という作品の後日談である。啓吉のファンであるという軍人の青年から小説を送られ、比較的よく出来ていると思って返事を書くと、その青年が訪ねてきて、啓吉が想像していたのとは全く違う貧相な彼が、親が病氣の上、新婚の妻をかかえて、窮乏のおりからどうしても至急お金があるのでこの作品をアイデア料として買って欲しいという。三十円ならと啓吉が提案するがそれでは足りないという。それで、啓吉は直接雑誌社へ持っていくことをすすめ、紹介状を書いた。しかし、結局三十円をその雑誌社が出すといってくれたものの社長が急病で会えなかったため、啓吉のところへ三十円でいいからと舞い戻ってきた。だが、軍人らしさのない、その卑屈さを不快に思った啓吉は結局彼を追い返し、あとで雑誌社から送

られてきた彼宛の三十円も雑誌社に返した。

以上が「小説『灰色の檻』」の内容である。「啓吉は、誰でもこの中尉に、自分と同様に接すれば、屹度自分と同じように、感情を傷つけられてしまいうだろうと云う確信で、この小説を書いた」としている。しかし、世評では、啓吉の態度が冷たすぎると批判的であったことに驚く。そして、その作品がもとで、モデルになったその中尉が軍隊を辞めなくてはならなくなったことを知らせてきた手紙を読んでの感想が先のものである。

ここには、何故菊池が身辺小説を書いたかがはっきり書かれていない。ここには、何故菊池が身辺小説を書いたかがはっきり書かれてい

る。「自分に接触して来る人生、それを描かないで、何処に作家の材料があるだろうか」

これこそが菊池寛が啓吉物を書いた一つの理由だったのである。

このような小説を書くことでモデルにした人物に迷惑がかからないと信じている強さ、また、自分の感性や判断の正しさを決して疑わない強さが菊池寛の特徴であろう。それは、自虐的に身辺小説を書く私小説作家とは全く別物である。

親友芥川のように漱石をも高く評価しなかった菊池が最も高く評価していたのが志賀直哉であったことは必然であった。この意識は、強靱な自我意識を持って身辺小説を書いていた志賀直哉に最も近いように思われるからである。もし、菊池が生まれつき経済的に

恵まれていたら、志賀のような心境小説を書いていったかもしれないのである。しかし、菊池はこのあと純文学を捨ててお金になる通俗小説作家に転身していくことになる。菊池の啓吉物の中の、少年や老婆との町での出会いを書いた身辺雑記的な「我鬼」や「道を訊く女」や「愛嬌者」などを見るとその思いを強くするのである。

大正十三年三月に『啓吉物語』を刊行したあと、「微苦笑」という作品の最後に啓吉は菊池の作品から姿を消す。「文藝春秋」の編集が忙しくなったのと、長編通俗小説に彼が転身していったからである。彼の啓吉物の中の身辺雑記は「文藝春秋」のコラム「話の屑籠」になり、そして、彼自身を描いた自伝的な啓吉物はある意味で最も完成した形として「半自叙伝」として結実していくのだった。

「半自叙伝」は作家が書いた自伝としては無類のものであり、そのたんたんとした簡潔な自己語りには、告白という気負いや銜いが全く無く、一つの文学作品として鑑賞に耐えるものである。「半自叙伝」と「或る阿呆の一生」を並べてみるまでも無く、芥川と同じ「新思潮派」とされながら、二人は全く対照的な作家だったことが、菊池の啓吉物を見ていく事でも確認できるのである。

(注一) 関口安義『評伝成瀬正一』(平成六年、日本エディター

スクール出版部)

(注二) 片山宏行『菊池寛の航跡』(平成九年、和泉書店)